

## 〔調査報告〕1923年の『大阪朝日新聞 神戸附録』 その2

箕野聡子（神戸海星女子学院大学）

柚谷英紀（関西学院大学）

島村健司（龍谷大学）

## 1. はじめに

近代の港湾都市神戸の文化形成を、さまざまな角度から研究する目的で2010年度より活動を開始した神戸近代文化研究会では、これまで『大阪朝日新聞 神戸附録』（1900/10/1～1924/12/31）や『大阪朝日新聞 神戸版』（1924/12/31～1940/12/31）を重要な資料として活用してきた。これらは、毎日1～2面にわたって県内の政治・経済・社会・文化・文学などのさまざまな記事や広告を掲載する重要なメディアである。神戸を中心に活躍する芸術家・文化人、関西のローカルなトピックなどを研究する際に、貴重な情報源となるものである。「雑草園」や「演芸たより」といった記事を、神戸とその周辺の文化的な事象の記録としてつづさに調査することによって、私たちは多くの示唆を得た。

今回、私たちは『大阪朝日新聞 神戸附録』の1923年の記事に的を絞り、その内容の精査を行った。9月には関東大震災があり、さまざまな文化人が関西に活動拠点を移したため、注目すべき事柄も多く、充実した内容が期待できると考えたからである。

調査方法としては、メンバーが『大阪朝日新聞 神戸附録』全ページに目を通し、以下の〔分類1〕〔分類2〕にあてはまるもののうち、たんなる情報の羅列については割愛し、何らかの批評性や価値付けを含むと思われる記事を重要視して、エクセルを用い、次のような形式でデータベース化することとした。その後、〔分類1〕に準じて担当を決め、さらに詳しく内容の精査を行った。

年月日	面	分類1	分類2	記事名 (見出し やリード)	執筆者	備考 (内容の 紹介など)
-----	---	-----	-----	----------------------	-----	---------------------

〔分類1〕文学、映画、演劇、芸能、美術、音楽、スポーツ、教育、宗教、文化

〔分類2〕小説、詩、短歌、俳句、評論、随筆、漫画、催事、広告、紹介

なお、本稿は、「〔調査報告〕1923年の『大阪朝日新聞 神戸附録』 その1」（『武庫川女子大学紀要』61号、2014・3発行予定）を引き継ぐものであり、分量などの問題から二つに分けた報告の後半である。

以下には、芸能と美術・写真に関する調査報告を行う。その後、簡単なまとめを付すこととする。

## 2. 芸能に関する動向

1923（大正12）年の新開地には、飲食店や百貨店、映画館とともに、古典芸能を上演する劇場が多く立ち並んでいた。市電を挟み、海側の湊町4丁目には、相生座、大正座、千代廼座、神戸劇場などがあり、山側の中道通1丁目には、聚楽館、そして中央劇場があった。「演芸たより」には、これら新開地の劇場に加えて、八千代座（楠公前）や松本座（楠公西門）、そして千歳座・御代之座・三宮歌舞伎座などの三宮の劇場の上演演目情報が毎日掲載されていた。

## 浪曲、落語、講談、浄瑠璃など

相生座は1870(明治40)年に劇場として真っ先に新開地に進出した。歌舞伎も掛ける劇場であるが、1923年には主に新派劇の劇場として久保田清一派、熊谷武雄一派、都築文雄一派の芝居を上演した。

大正座は寄席である。ここで多く演じられたのは浪曲、浪花節である。二代目吉田奈良丸とともに第一期浪曲黄金期を作り上げた京山小圓が、一行を引き連れ公演を行っている。吉田奈良丸の妻であり関西浪曲界の女流看板として活躍した初代春野百合子の活躍も目立つ。ここに出演した浪曲師たちは、同日に三宮雑居亭にも出演していることが多い。さらには、三宮歌舞伎座、聚楽館でも京山小圓一行の活躍は目立つ。

同じ寄席でも千代廼座は、落語が主であった。爆笑王といわれた初代桂春団治を始め、三代三遊亭圓馬、三代桂米団治を大看板に、東京から初代三遊亭圓右、そして夏目漱石の「三四郎」にも登場する三代柳家小さん等を迎えて高座を賑わせていた。1930年代には漫才が寄席の主役になり、上方落語は存亡の危機を迎えるのであるが、1923年の神戸では、落語は健在である。また、落語の席で講談をすることを好んだ桂家残月が講談を読み、落語と講談とが同じ寄席で公演を行う形を作っていた。残月は、七代桂文治の身内で、関西では講積の寄席には出ず、落語の寄席に出た。後、落語の寄席において色物として漫才や奇術などを区別するようになっても、講談は落語と同じく黒字で記されたことも残月らの活動の成果と推測できる。

松本座は、語り物を掛けている。語り物とは、素浄瑠璃のことである。「太十(絵本太功記 十段目)」や「忠八(仮名手本忠臣蔵 八段目)」といった時代物から、「新口(傾城恋飛脚 新口村の段)」や「酒屋(艶容女舞衣 酒屋の段)」などの世話物まで、連日、

十に近い演目が語られていた。浄瑠璃のなかでも、神戸では娘義太夫が人気であった。松本座でも多くの女性が語っているが、娘義太夫はその人気から、寄席だけではなく劇場にも進出している。豊竹団司一行は八千代座、そして聚楽館に出演した。八千代座興行の折には、団司が顔写真付きで紹介されている

(4/12)。さらに、多くのレコードを残した娘義太夫界のスター豊竹呂昇が関東大震災後の八千代座に出演した。「演芸たより」(9/24)は、トップ記事として「八千代座は十月下旬呂昇の浄瑠璃を開演」と掲げ、期待の強さを示した。木下柰太郎や志賀直哉らが娘義太夫をよく聴いていたことは知られているが、娘義太夫演奏家の多くは、大阪で修業して東京に進出している。呂昇もまた、文楽の名人たちに師事していた。大阪の寄席で活躍した後、東京を含め全国を巡業し、東京有楽座の「ドル箱」と言われるほどに成長したのである。呂昇一行は「久々の興行とて好人気」(10/2)と迎えられ、「演芸たより」は日替わりの演目と演者の詳細を掲載したが、3日に呂昇が感冒に罹り、「呂昇が病気で八千代座打揚げ」(10/4)の見出しで、打ち揚げを惜しむ記事を掲載した。

神戸劇場に関する記事は少ない。「震災避難者萬歳安来節合同一座」(10/5)の連日盛況の興行が特筆すべき事項であろう。1923年の神戸では、萬歳や安来節の一座が神戸劇場や三宮御代之座で、そしてさらに安来節は八千代座、三宮歌舞伎座でも、盛んに興行を行っていた。後に吉本興業(以下吉本とのみ記す)創業者の吉本せい(以下吉本とのみ記す)創業者の吉本せい(以下吉本とのみ記す)が、この萬歳(1933年に漫才と表記を変更)や安来節を寄席の色物として定着させ大人気を得るが、1923年には、『神戸附録』に紹介される西宮花月でも吉本が萬歳や安来節を色物として採り入れた記事はまだない。

以上のように、神戸では、唸る（浪曲）、話す（落語）、語る（浄瑠璃）、読む（講談）、踊る（安来節）といった芸能が日々舞台に掛けられていた。そして、1923年には、吉本の桂春団治、松竹合名会社（後の松竹株式会社。以下松竹とのみ記す）の豊竹呂昇など、全国的な人気を誇る芸人の興行もあったのである。

さらに、神戸では歌舞伎の興行も盛んであった。新開地では、歌舞伎興行を松竹の経営する中央劇場が主に担っていたが、1923年1月、中央劇場は焼失する。次に、1923年の神戸の歌舞伎の動向について考察したい。

## 歌舞伎

中央劇場は、元旦より二代目市川右団治、四代目片岡我童（後の十二代目片岡仁左衛門）、六代目嵐吉三郎以下の吉例大歌舞伎で幕を開けた。大阪朝日新聞は「本紙愛読者に優待観劇券を配布」（1/1）し、連日の盛況を支えた。大阪朝日新聞が優待券を配布したのは、中央劇場が昼の出し物に大阪朝日新聞連載の埒団右衛門の脚本を使用したからだ。出し物は、その連載小説の他に、昼の部は「玉藻前旭袂（道春館の段）」、「壺坂観音霊験記」、「廓文章（吉田屋の段）」、夜の部は、「伽羅先代萩（御殿から床下まで）」、「高山彦九郎」、「娘道成寺」、そして大森痴雪が我童に書き下ろした「一節きり（二幕）」である。大森痴雪は、元大阪朝日新聞の記者で1917年に松竹に入社した劇作家である。新聞が劇場と繋がるといったこの商法には、松竹経営の影響をみることができるだろう。「演芸たより」（1/2）は、「中央劇場の大阪歌舞伎は昼夜狂言を別立にした外観覧料の低下が人気叶ひ連日盛況である」と記しているが、これは、演目を＜通し＞ではなく、人気のある特定の段だけを選んで演じることで上演時間を短縮し、それにより、昼の部と夜の部との二部制を取

り入れることができたことを意味する。観覧料は、時間の短縮に合わせて下げられた。

しかし、1月6日、中央劇場は不慮の火災から焼失する。この火災で松竹は、神戸における唯一の劇場を失うことになった。全国に数多くの劇場を持つことを目指していた松竹は、大阪松竹座開業（5/17）を控えていたにもかかわらず、元の中央劇場後地で「名も松竹劇場と改め」た劇場を「許可次第建築に着手する」（5/8）ことを決める。そして年末、松竹は「新築落成した松竹劇場」（12/23）で翌年の新春公演として竣工記念興行東西合同大歌舞伎を企画し、三代目中村雀右衛門に加え、東京から二代目市川猿左、七代目市川中車を迎える企画を発表し新聞広告（12/28）を出した。「時間と経済の両方面から考慮して大歌舞伎の昼夜二部興行とし」たという出し物は、昼の部が「和田合戦女舞鶴（門破りより市若初陣迄）」、「大森痴雪氏新作 湊川（一幕）」、「一谷嫩軍記（陣屋の場）」、「操三番叟」、夜の部が「双蝶々曲輪日記（角力場一幕）」、「彦山権現誓助劔（毛谷村の場）」、「素襖落」、「河竹黙阿弥翁作 河内山（一幕）」、「日高川」である。「昼の部正午◎夜の部午後五時三十分開幕」と開始時間も明示され、入場料は「特等4円、一等3円80銭、椅子席4円、二等1円80銭、三等1円、四等50銭」であった。この金額は、聚楽館が7月に行った満十周年記念興行の六代目尾上梅幸と十五代目市村羽左衛門一座の東京大歌舞伎の、「一等7円50銭、二等5円、三等2円、四等1円」（7/11）の約半額となっている。東京大歌舞伎の出し物は「加賀見山再岩藤」、「後月酒宴島台」、「伊勢音頭恋寝刃」で、全部で約7時間の上演時間となっている。

松竹は、自前の劇場を失っていた間、他の劇場を借りて1923年中に神戸でさらに2回、歌舞伎を興行している。1回目は、中央劇場

焼失のため中止された神戸吉例大歌舞伎を、聚楽館で「二月一日を返り初日に華々しく再演」(1/30)したときである。大阪朝日新聞社は、1月に好評だった読者への「割引観劇券」を復活させて配った。演目はやはり昼夜二部制とし、上演時間を減らして、入場料を下げた。加えて「一幕切見二、三、四等券を発行」(2/4)し、観客が劇場に足繁く通えるように努力したのである。

2回目は、震災後10月の八千代座での興行である。中村雀右衛門、嵐吉三郎、二代目実川延若らが出演する大阪大歌舞伎を上演した。これは、「大阪の若手を代表する腕揃ひである。演物も「源平布引瀧」、新作「伊勢屋心中」、「謎帯一寸徳兵衛」、「奴道成寺」と俗受よりも内容本位にしたところ震災後の芝居として可成各方面のことが考慮されたい」(10/14)と「八千代座劇」の見出しで解説される。松竹に係わることで、価格面でもさらに画期的な配慮をみせたのがこの興行である。「震災後の気運に伴ひ破格の低下を断行し」、初日は「半額値段」にして「特等2円10銭、一等2円、二等75銭、三等50銭、四等35銭、五等20銭」(10/11)とした。この半額の好評を受けて八千代座は、10月31日初日の「東京若手俳優人気を中心となる沢村伝二郎 襲名後当地初御目見得の五代目嵐徳三郎」(10/31)を冠した東西合同大歌舞伎でも「各等半額」の表示が入った新聞広告を出した。

以上のような歌舞伎の動向とともに、神戸で注目しなければならないのは、歌舞伎役者達の新しい演劇活動の動向である。片岡羽左衛門の弟子である坂東左門は、女優も含んだ豊勢劇一座を率いて聚楽館で8月に納涼盆興行東京青年歌舞伎を行った。豊勢劇は「門閥でないといくら腕が立つても認められぬ現在の劇壇に不平を抱き発奮の旗幟を翻して樹立した」(8/5)ものである。さらに、十三代目

守田勘弥は「神戸が文芸座旗揚げの地」(11/7)と神戸又新日報主催文芸座講演会で述べ、聚楽館における11月の「恩讐の彼方に」そのほか一座上演」を行った。名古屋にいて震災の難を逃れ、いち早く活動を再開した守田勘弥の文芸座は、「関西各地の観客が案外新しい芝居に理解があること、といふよりは古い陳套な歌舞伎に愛想をつかして居られる程度のヒドいことには驚きました、眠れる劇界に取つてはこれは地震以上の騒ぎでせう」

(「太る文芸座」11/12)と当時の歌舞伎を批判し、新しい演劇活動への意欲を語ったのである。

松竹が劇場を失っていた1923年の神戸の劇場では、従来の歌舞伎に対抗する新しい劇が歌舞伎界の内部から立ちあがりその形を明確に表現していたといえよう。しかし、1923年末には、神戸は再び歌舞伎に注目し、劇場は歌舞伎を掛けて行く。これには、9月1日の関東大震災の影響と、年末から次々にやって来た外国船を迎えるための港町神戸の観光都市としての役割があったことが、『神戸附録』からは読み取ることができるのである。

### 関東大震災の影響と1923年末の神戸の劇場

9月21日の記事「花抑と劇界」には、「芝居は何れも御難、寄席の如きも閑古鳥を啼かせてある向が多い」といった記述や、「聚楽館の如き都合によれば十月を休館してもと腕を組み、松竹は八千代座を十月一杯借り切つたがこれも人気回復の思惑が少し早すぎた模様」と言った記述がみられる。9月23日の「演芸たより」には、「聚楽館は休館中」の文字を認めることができる。しかし聚楽館は、曾我廼家五九郎が神戸で旗揚げすることにしたため、9月末から、講演会や舞踏会のために開場し、10月には10日から五九郎劇を開演、28日からは澤田正二郎の新国劇を、11月6日からは守田勘弥の文芸座を受け入れた。これ

らの興行が盛況であったため、「関東大震災の影響によって一時沈滞の底にあった神戸の劇界も十月中旬からヤツと活況の曙光を見」（「甦った神戸の劇界」10/8）たと記された。

そして、震災の自粛ムードが解けた11月には、東京の歌舞伎役者たちが関西での興行企画を具体化していく。六代目尾上菊五郎は、「菊五郎一座が来春二月から宝塚歌劇場」で公演を行うことを発表した（「宝塚歌劇場に立籠もり 菊五郎は隔月出演 歌劇は奇数月に興行する」11/10）のである。松竹劇場が、新春公演に東京から市川猿之助、市川中車を迎えることは先にあげたが、他の劇場も歌舞伎興行に力を入れ始めた。12月23日には、「春芝居の景況 歌舞伎劇全盛」という見出しで、「初春の神戸興行界は松竹劇場（元の中央劇場）の新築によって一段と活気を帯びた」とし、新春芝居は「聚楽館が単り喜劇で後は全部歌舞伎で蓋を開ける」と、神戸における歌舞伎熱を報じた。「新春劇壇の陣容」（12/28）では、聚楽館は五九郎一派の喜劇を掛けるが、相生座は四代目尾上紋三郎一座の「鞍馬山だんまり」、「実録先代萩」、「三人吉三巴白波」を、八千代座は「沢村伝二郎と片岡松之助一座の合同劇」で「義士劇」、「川中島」、「御詠色新染」を出すで紹介されている。神戸の劇場がここまで歌舞伎興行にこだわった理由には、関東大震災の影響以外に次のことが考えられる。神戸が外国から多くの観光客を迎えることになったのである。12月20日の記事には、「大観光団を迎へる神戸」の見出しで「歳末から来春にかけて世界周遊の米国観光団が」「ざつと二千五百名ばかり」「続々来朝する」予定が書かれており、神戸の劇場は、外国人観光客で賑わうことが予想された。外国からの観光客をもてなすに相応しい芸能として神戸が選んだのが、歌舞伎であったのだ。

新しい松竹劇場は、二階席をすべて椅子席にし、「二階観覧席は内外人とも御意に適ふ単独椅子席に其他当代文化の粋を集めたる神戸に最も応しき新劇場」（12/28）と広告を出した。松竹劇場はさらに、お茶屋の制度とは関係のない和洋食の大食堂も設置し、新しい劇場としてイメージを強調した。1923年12月末の神戸の劇場は、傾きかけていた歌舞伎興行の再生と、レトロとモダンとの両イメージを武器にした観光都市としての神戸の街づくりに向け、新しい活気に満ちていたといえよう。

（柚谷英紀・箕野聡子）

### 3. 美術・写真に関する動向

大正期に入ると、神戸の美術界では具体的な動きが活発化してくる。ここで取り上げる1923年から見ると、前年にはとくに「神戸美術協会」（のちの兵庫県美術協会）が立ち上がったたり、角野半治郎や今井朝路らによるグループ「コルポー」が結成されたりするなど注目すべき動きが出てくる。1923年はこのような動向を受けて具体的な展開が見て取れる。また、関東大震災に相即した神戸における美術界の状況の一端を知るうえでも、非常に重要な意味を持っているといえよう。

神戸の写真界では、のちに「構成派」の写真家を牽引していくことになる芸術写真の担い手・淵上白陽が1921年の第1回全関西写真競技会で一等入選を果たして頭角を現わすが、1923年の神戸でも写真競技会は特徴的な出来事だろう。そこには神戸における写真団体の参入も見て取れる。また、大阪朝日新聞社主催であったエミール・オットー・ホッペの印画展についても特筆すべきものとなっている。

#### 神戸美術協会展と神戸美術展覧会

神戸美術協会展については、「美術協会展」(7/9)で「或る試み、或る努力、或る研究といったやうな澁滞な空気も別に漂つて居ないやうだし、それかと云つて反対にどつしりした壮重味も見えない」と批判的な総評となっているが、個別の作家に目を向けると、たとえば「岡田泰祥氏のも新しいもので色彩や感触に新鮮な味ひはあるがも少し何とかする必要はないか、但「ベルサイユ」は氏に取つて尊い試作である。」「洋画では亀高文子女史の「ダリヤ」が光つてゐる、別に偉大な作ではないが純化された芸術であることによも間違ひはあるまい。」「今井朝路氏の「骸を抱く男」は些かデカダンだかモー一つの「ズンガリアの氷原」は矢張り詩である、絵画が作者の生活表現になつてゐるところに値打がある」など長所も見出されている。

神戸美術協会展が1922年の発足当時、「神戸の帝展」と評されていたのと打つて変わり、1923年には、神戸新聞通信社主催の神戸美術展覧会が第8回を数え、「神戸の帝展を以て任ずる神戸美術展覧会」とされ、「出品は全然推薦形式に抛つたもので、現代美術界のあらゆる系統の人々を網羅したところに本展覧会の特色がある」（「神展洋画部開会」5/21）と紹介されている。「神展洋画を観る」(5/24)では、「郷土的に限られた展覧会としてこれ以上を望むのは至難なことであらうと思はれる程作品はみな相当のレベルに達してゐる。」とする一方で、「美しい色、なだらかな線—それは観る者の心に気持よく響きはするがその響は実にかすかなものである。( )そしてその安易さの後に起つてくる倦怠と不満—それを打ち消してくれる様な作品は不幸にして見当らない。」との批判的な見方もされている。このあと、数名の作品に対する批評がつづく。たとえば中山正実の作品について、「穏健な態度でよく纏めてはあるが熱がない。美しいが其美しさは浅い様に思はれる。」と

評されている。また「一般出品画の中では牧野虎雄氏の数点、高間惣七氏の静物、渡邊百合子嬢の少女の大作、小出楯重氏の二点、普門暁氏の未来派作品などが人気を呼んでゐる」（「神展の仏国名画」5/27）とある。この展覧会は開期を延長する告知もあり、人気を博していたことがうかがえる（「神展日延べ」5/28）。「神展日本画部合評(上)」(6/5)では、具体的な日本画家作品について触れられている。たとえば水上草久「支那街の夜」について、「変つた画ですね、未来派を日本画で行つたもので是だけに成功すれば立派なものです。」とある。また、水越松南「夏木新隆」について、「凭うした南画を見せられると洋画の印象派と表現派を一緒にしたやうな処がある。」、村上華岳「林間の聖者、仏陀、風景」について、「画家が気持を表現するのに、材料は何を用ひても構はないが、それには常に真面目な要求に基かなければならぬ。鉛筆、ペン、筆、油を併用するのも勿論問題ではない。華岳氏は常に斯うした試みに真摯な態度で労力される」というように、伝統的な技法よりも、未来派や表現派など前衛的な側面で評価されている。「神展日本画部合評(下)」(6/8)でも、たとえば秦テロ「彼女の追懐、猶来らむ」について、「ゴオガンのタヒチイの女を思はせますね。」「蓋し出品中の圧巻だ。」とある。

### コルボーなどの美術団体

「コルボー画展 洋画家六人組」(3/16)では、今井朝路、小川太郎、角野判治郎、田中香苗、福井市郎、進藤吾一のメンバー6人の写真入りで居留地にて「第一回洋画展覧会」を行うことが記され、「コルボー画評」(3/23)では、「立体派がゝつた田中君と作者自身の感情の表現を主とした今井君を除けば、他の四名は皆堅実に大地に蹠を密着させて歩んでゐるやうだ。」と評されている。なかでも今

井朝路に対する批評が多く、画法の基礎を問われながらも、「人間の個性の感情を、詩を、魂を、斯くまで純に露骨に現はす者は珍らしい（。）全く今井君独特の壇上である／「詩を書きはじめて年のIKUSAN」「マドモアゼルビョンネ」「十月の夜の哈爾賓」などの持つ人間の詩が一番よく解る」などと好評が寄せられている。

とくに注目したいのは第2回の展覧である。「コルボー第二回 東都作家洋画展」(11/14)では、「神戸に於ける洋画界に異彩を放つてゐるコルボー会の同人諸氏が、灰燼の都に在つて尚且つ芸術のために精進しつゝある友人のために」とあり、関東大震災を受けての趣向であったことがわかる。当時東京を中心に活動していた作家作品との交通を果した貴重な場であったといえよう。同記事では、東都作家の顔ぶれとして、遠山五郎、遠山教圓、鈴木金平、鈴木良三、鈴木保徳、曾宮一念、寺内万次郎、鶴見守雄、鶴田吾郎、耳野三郎の名前が挙がっており、「新進画家として帝展及び二科派の錚々たる新人」とある。これらの面々は、およそ白馬会洋画研究所、東京美術学校卒業、黒田清輝に師事、中村彝に師事、金塔社の結成などの共通項を有している。「東都作家洋画展を観る」(11/18)では具体的な寸評がある。たとえば「遠山五郎氏は「廃園」の淋しい色に可成り苦しんであるが少ししつこい感もする」、「曾宮一念氏の「はぎ」に今迄私達の見出し得なかつた「はぎ」の持つてゐる色と姿とを見出すことが出来たのは一つの悦びである。」、「鶴田吾郎氏の震災の跡を描いた二つの作品のうち「廃墟」の大地は色彩を少し誇張してあるやうだ、鶴見守雄氏の「波」の空の色は単調のうちにある魅力を持つてゐる。」などと評されている。これらの批評文から明らかなように色彩を注視した傾向がある。ここには後期印象派以降の思考やカンディスキの色彩論、あるいは当時

の日本で注目されていたマティスの影響が背景にあるのかもしれない。コルボーのメンバーに対しても、たとえば「(今井朝路の)「孤独なる魂は永遠に向ひて昇る」は余りに浅い。炎をあんな概念的な、単純な形に現はさないで色彩そのものに表現し、人物の形にももつとやわらか味を出した方がよかつたのではないか。」、「(小川太郎は)余りに物を美しく見過ぎてゐる。「休日の工場」は決して氏自身にとつて誇張したものではあるまいが、あの色はどうしても装飾画の色彩だ。」と色彩にこだわる点が見て取れる。

ところで、『神戸附録』には神戸通信局独自の「雑草園」なる欄が設けられており、読者との交流を一つの目的とした集まりが紙面を越えて「スケッチの会」に発展した経緯が読み取れる(「雑草園スケッチの会を独立した永続のものに」3/19)。第2回の際にはコルボーの面々も参加し、「今井あさち氏から画家の使命と云つたやうな話を聞くことが出来たのは当日第一の収穫であつた」ことが記されている(「キャンバスを肩にして すけつちの会」5/14)。さらに「スケッチの会」での作品で展覧会を催す(「スケッチ会員の作品十四点集る」5/21、24にも関連記事)。「スケッチの会第一回作品展」(6/4)では、コルボーの今井朝路や福井市郎らの作品が「異彩」を放っていると報告されている。このような試みは神戸におけるアカデミックな美術の展開にあつて、大衆に美術とのふれあひを感得させる貴重な機会であつたと同時に、コルボーのメンバーもこうした集いにかかわっていく性質を有していたことがうかがえる。

コルボーのようなあり方は1923年に結成されていく少人数による美術団体に波及したのかもしれない。たとえば北村今三ら関西学院高等部出身6人による洋画・木版の会「月徒会」。「月徒会洋画展」(5/7)の紹介記事があり、「人間の芸術は止むに止まれぬ生活

表現の様式に過ぎない、絵を描く、詩を作る、小説を書く——といふ特殊の技能ではなく、自己表現慾が或ひは絵画となり詩歌となり小説の形式となつて現はれるのであつて日常の談話もそれが自己表現の一端である以上一種の芸術たるに相違ない」（「月徒社画展（上）」5/12）という同会の意向が示され、各人の作品評として、たとえば「北邨英次君の作品は野を渡る微風のやうな感触を示してゐる、その微風の吹起る発祥地帯がセザンヌの辺であらうとも云はれ、或ひは北邨君自身の才氣？の然らしむるところかとも云はれてゐる」「岡本武男君のものでは人物よりも風景の方が秀れてゐる、観る人人の心持にもよらうが風景の一（赤い屋根のある方）などは非常に面白い（。）」「奈良高畑」「芦屋風景」など小さいながらオツなところがある」「木版画は北村今三君と能摩治男君とが出陳してゐる、能摩君のウマ味のある刀触と色彩上の苦心（広重の藍にも劣らぬ色がある）には感心させられ、北村君の細緻な技巧によつて表現された或る鋭さは何より尊い、弱々しいけれども値打は機鋭さにある」（「月徒社画展（下）」5/13）と評されている。ほかにも「高原社展覧会」（5/11）の紹介記事には京高工出身者の集まりによる洋画展が楠公前カフェーブラジルにて行われることや、「十二秋社美術展」（10/1）では三田町の芸術家による展覧の紹介があったり、「『プラノアル』新洋画生る」（12/10）では坪井甚喜、神原浩、亀高文子、大庭志津夫、山本治平らによる神戸を中心とした若い画家の団体が結成されたという記事も確認できる。

### 画家個人の動向

諸外国への／からの窓口として重要な役割を担う港湾都市神戸であるだけに渡航や帰国にかかわる画家たちの動向がしばしば報じられている。たとえば岡田泰祥について「欧州

の絵行脚より無事帰朝した泰祥画伯」（1/17）という記事がある。「仏国は矢張り印象派全盛でルノアール。ゴッホ・セザンヌ等に盛名があり日本でチャホヤするマチスは向ふで余り評判にしてゐない」という泰祥の言葉も披歴されている。また、メキシコやスペイン、フランスなど、およそ10年の海外生活を経て1923年に帰国した神原浩について、「神原浩個展」（7/3）では、「私は可成り長く巴里生活をして彼処に漂ふ頹廢の気分と、その奥にひそめる厳肅な自己反省の心持とを捉へ得たと思ふ、この一種の寂寞悲哀の心境にあつて私は静かに南欧の風景、南洋の自然を描いた、私の今回並べた作品の中少くも十点はこの心持が色調の上に出てゐると信じてゐる、私は私の作品を通じて私と云ふ男を懐しき郷土の人々に知つて貰ひたい」という神原の述懐と感慨が示されている。これらのように帰国者から海外の情勢や帰国した感慨を直接話法で提示しているところに注目度が反映されているだろう。

岡田泰祥や神原浩のような扱いではないが、関西学院出身の洋画家松田道太郎が県会議事堂で渡欧記念洋画展覧会を開催することについても注目されたようである（「松田氏展覧会」1/23、28）。28日の記事では松田の絵画について「全てが印象派的な筆の加味された軟い調子のもの」との評があり、同じころに帰国した岡田泰祥の談話の中の「印象派全盛」という言述と重なってくる。

ほかにも「新帰朝の洋画家」と紹介されている小寺健吉（「美術協会展 魁は小寺謙吉氏の個人洋画展」（6/25））、滞欧中の師・大久保作次郎のあとを追ひ、パリへ渡る旨が記されている「中山正実氏 お名残展覧会」（12/6）などがあることを付言しておく。

### 写真界



1923年の写真界のトピックとして最も目立った記事の1つは、大阪朝日新聞社主催ということもあったが、エミール・オットー・ホッペの印画展についてのものである。5月にはおよそ一葉ずつホッペによる写真が挿入されたいくつかの記事が散見できる。たとえば具体的な言及を拾ってみると、「紐育の真髓 工業試験所に展覧中のホツペの作品」

(5/12、「四角と稜(紐育の真髓中より)」写真一葉あり)では、「作者の詩感=生命のリズムを感じることが出来る「幽霊の町」にしても「夢幻曲」にしても、これ等の作品の何処かにボードレールの詩に接するが如き爛熟した近代的ロマンチックの匂が溢れてゐる。」と評され、「芸術写真の一挿話 ホツペ氏作「イヴ」のロマンス」(5/13、「イヴ(人様々の中より)」写真一葉あり)では、「ホツペは其優秀なる手法によつて製作する印画に、光線による形容の美しさ以外のあるものを表現しやうとする。彼は詩人の持つてゐるリズムと、小説家の持つてゐる題材選択の力を持つてゐる。」と記されている。このように一側面ではあるが文学性をもって評言されている。

「「カメラ界」白陽(第二巻第三号)」(5/4)では、淵上白陽主宰の写真雑誌の当巻号の告知とともに、「記事にもいゝものがある、然しまだ文芸と芸術写真との歩み寄りに大分努力を要する」などの寸評が付されており、ホッペの作品を批評する際などにもみられたように、ここでも文芸との遠近感をもって語っていることがわかる。

ほかには、六甲苦楽園(株)主催、大阪朝日新聞神戸通信局後援で行われた「阪神写真競技大会」が注目できるだろう。「阪神写真競技会印画展覧会」(6/1)では「等内入選印画の多くは全関西競技会出品画以上の出来栄を示してゐるとも思はれて、出品者諸子の真摯な研究的態度に敬服した。就中団体的に出

品されてゐた神戸光波会、神戸光友倶楽部の両会所属の人々の力作は出品中特に異彩を放つてゐた様である。」とされている。当時「光波会」などが集団的に写真術のあり方を向上させていく教導的な一面を持っていたこともさることながら、大衆に写真の魅力を開いていく役割を担った、こうした写真競技会の場は重要視される。この年に催された「神戸写真競技大会」もそのような役割を担っていただろう。「雨の街に競ふ 五百のカメラ党」

(11/19)では、当日の賑わう模様が会場の湊川遊園地に詰め寄せる人々の写真一葉とともにレポートされている。大衆的に写真をアピールする求心力は、「在来の形式尊重主義から内容描写主義に一段階を進め、説明、記録といふ方面から、対自然の情味、真実相を表現されんとした各人の常套打破の努力に尠なからぬ敬意を払ひたいと思ひます」(「著しい進歩の跡」12/3)とする「競技写真審査概評」に結実されている。

(島村健司)

#### 4. おわりに

以上、1923年の『大阪朝日新聞 神戸附録』について、芸能、美術・写真に関する動向を概観した。芸能に関しては、浪曲・落語・浄瑠璃・歌舞伎などの興行についての動向を明らかにし、1923年に外国人観光客や被災者を受け入れた神戸が、観光地として伝統芸能を再評価していく様子を明らかにした。美術に関しては、神戸美術協会展と神戸美術展覧会、コルボーなどの美術団体、画家個人の動向を明らかにした。とくに前衛的なとらえ方が注目された。写真に関しては、芸術的な写真の受容状況と写真競技会に代表される大衆的広がりを中心にした。

この他にも別稿「〔調査報告〕1923年の『大阪朝日新聞 神戸附録』 その1」では、「雑

草園」に関して、さまざまな園丁（支局員）たちの存在、〈郷土〉前景化の試み、文化活動の企画と実践とを明らかにした（大橋毅彦）。また、映画に関して、神戸新開地の映画館の様子、1923年の概括、映画への集客誘引の様相を明らかにした（永井敦子）。さらに、演劇に関して、喜劇、新国劇に強いスポットが当てられていたことを明らかにした（山本欣司）。参照いただけたら幸いである。今回の試みで『大阪朝日新聞 神戸附録』の性質の一端が明らかになったのではないかと考える。

〔分類1〕に準じていえば、文学、音楽、スポーツ、教育、宗教、文化など、記事・事項のピックアップは果たしたものの、今回は調査が行き届かなかったジャンルもある。それらを今後の課題として、神戸近代文化研究会ではさらなる調査・研究を続けていきたい。